

チャノミドリヒメヨコバイ

1 形態と生態

- (1) 成虫の体長は約3mmで、青緑色です。幼虫は黄緑色ですが、葉の上にいると白く見えます。
- (2) 成虫・幼虫ともに茶芽の若い葉や幼梢などを刺して汁を吸います。
- (3) 成虫で越冬し、例年、6月下旬頃から発生が目立つようになります。
- (4) 特に7月と9月に多発しやすい特徴があります。
- (5) 卵は約1週間でふ化し、ふ化後、約2週間で成虫となり、平均寿命は約1か月です。
- (6) 発生量は天候によって左右され、乾燥した天候が続くと発生が多くなりますが、台風があったり、降雨日数が多い時には抑制されます。
- (7) しかし、初発時の6月下旬頃に降雨が続いても急激に増加し、二番茶の収穫ができなくなるくらいに発生することもあります。



写真1 成虫(体長約3mm)



写真2 幼虫(体長約1~2mm)

2 被害の様子

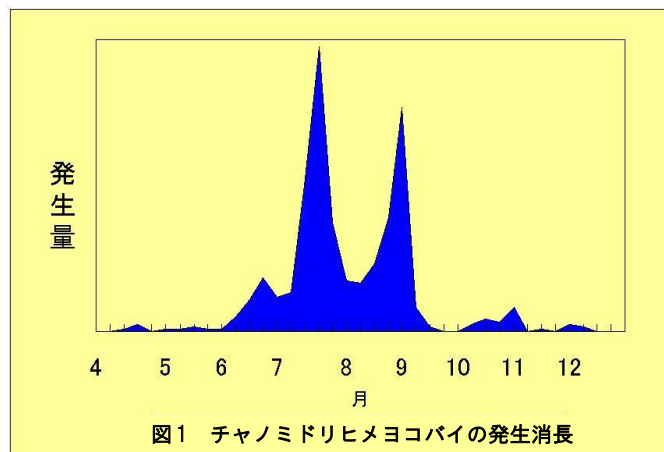
- (1) 初めは、新芽の葉を透かしてみると葉脈褐変がわかる程度の被害ですが、加害が進むと、葉を透かさなくとも葉脈褐変がわかるようになり、しだいに黒色の枯死部が辺縁部に見られるようになります。
- (2) 甚大な被害を受けると、新芽の葉の枯死部が葉の中央にまで及びます。
- (3) 被害が進むと新芽の生育が止まり、収量が低下したり、生育が極端に悪くなったりします。
- (4) また、秋期に被害を受けた葉は冬期の寒干害に弱く、落葉や枯死を招きやすい傾向があります。



写真3 チャノミドリヒメヨコバイによる葉の被害

3 発生について

- (1) 成虫で越冬し、4月～10月頃まで、年6～8回発生が見られます。
- (2) 発消長は右図のとおりで、主に高温期にあたる6月下旬～9月上旬の夏秋期に多発します。
- (3) 例年、生息密度が増加するのは二番茶摘採後の7月下旬頃からですが、6月中旬から急激に増加し、二番茶芽に被害をもたらすことがあります。
- (4) 秋期の増加期になっても、台風や長雨等により少なく経過することがあります。



4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除

- ア 二番茶を収穫しない場合は、一番茶収穫後に10cm程度の浅刈りを実施し、可能な場合はさらに8月に三番茶芽上位3葉を整枝すると発生を抑制することが出来ます。
- イ 浅刈りや薬剤散布により生息密度を低下させた後、光反射テープ(銀色のテープで防虫テープとも呼ばれる)を畦に平行に1畦あたり6本設置すると発生を抑制することが出来ます。
- ウ 二番茶収穫前の発生が多い場合は、被害程度が大きくなる前に早めに摘採しましょう。

(2) 薬剤防除

- ア 発生量に応じて薬剤散布を実施します。
- イ 通常散布量は200 μ g/10aとしますが、ダニ剤との混用や越冬前防除時期等の摘採面より上に枝条が長く伸びている場合は、400 μ g/10aに増量する必要があります。
- ウ クモ類などの捕食天敵に捕食されるため、クモ類に影響の少ない薬剤を使用すると効果が高くなります。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県茶業研究所栽培担当 TEL04-2936-1351、埼玉県病虫害防除所 TEL048-539-0661

